

ツキノワグマ対策・「with Bear」時代の登山術

白石 俊 明 (富山県 立山カルデラ砂防博物館)

近年、富山県の立山周辺域では、登山者が被害者となるツキノワグマによる人身事故・食料の持ち去り・テントや車両の破壊、ニアミス事例が起きている。これらの発生地は登山起点となる駅近隣・バス停・登山口・駐車場・キャンプ場で、多くの登山者が想定するであろう「登山道でのぼったり遭遇」とシチュエーションが異なる。近年、生息状況や行動様式が変化し身近な存在になったツキノワグマとの軋轢を減らすため、登山者に出発前から始めて欲しいクマ対策について述べる。



高山帯の登山道で目撃された成獣。(室堂平～雄山)
撮影:SE, 2012.9.25

1. 背景 増える「新世代クマ」と「アーバンベア」

ツキノワグマ（以下、クマ）は植物質を中心に採食する雑食性の大型哺乳類で、国内では本州と四国の森林に生息する（北海道にはヒグマが生息し、本州にヒグマは生息しない）。九州ではすでに絶滅し、四国は個体数が極めて少なく、絶滅を回避するために積極的な保全策が必要とされている。一方、

本州においては、クマの分布域（生息地の面積）が増加しており、クマによる人身被害は2000年以降、高止まり傾向にある。これらの要因として挙げられるのが、狩猟圧の低下、中山間地の過疎化による里山環境の変化などである。かつて人の生活圏と大型哺乳類の住処を隔てていた里山は、奥山と化して境界線や緩衝地帯として機能しなくなっている。それどころか、放棄された田畑や廃村となった集落はヤブや林になり、クマ・ニホンジカ・イノシシ等の住処そのもの、繁殖の場となっている。また狩猟者も高齢化していて、猟犬を伴い野山で獲物を追い回す狩猟スタイルは減少し、犬を放し飼いにする慣習もなくなった。現代においてはクマ等の大型哺乳類が「人や犬を恐ろしい天敵」と学ぶ機会は消失したと言えるのではないだろうか。ことクマについては2000年頃から、警戒心が低く人に姿を見られても逃げ隠れしなかったり採食を続けたりする観察事例が増え、これらを「新世代クマ」とする称する言葉が生まれた。更に近年は、人の生活圏である集落内や市街地にクマが進入する事例が多発し人身被害も生じていて、これらのクマや現象を「アーバンベア」と呼んでいる。そうした中、人との距離感が近い「新世代クマやアーバンベア」との軋轢は、登山者との間にも目立つようになってきている。

2. 事例報告

◆立山周辺域でのクマ遭遇事例

事例① 2017年5月の大型連休最終日、午前10時頃、標高1,940mで残雪が数mある立山黒部アルペンルー

トの弥陀ヶ原バス停に、足を負傷した小型のクマが車道を走り下りてきた。クマはバス待合客の近くを通過し、その先で宿泊施設に入ろうと立ち上がってガラス戸に血痕を残し、進路を変えて斜面を登った先で数名の外国人とばったり出会い、クマは再び進路を変えて林へ走り去るニアミス事例があった。



残雪期の亜高山帯に現れた負傷したクマ。(弥陀ヶ原バス停)
撮影:UK,2017.5.7

事例② 2018年6月、13時頃、標高約1,000mの立山黒部アルペンルート中間駅「美女平駅」に近い山中で、登山者が小型のクマに数mの距離で遭遇した。登山者は転倒し、クマに顔や胸を噛まれたり引っかかれたりし重傷を負った。

事例③ 2019年9月、標高1,367mにある薬師岳方面への登山口に隣接する「折立キャンプ場」で、登山中、張りっぱなしにしておいたテントが破られ、テント内のクーラーボックス(中身はお茶のみ)にクマの齧り跡が残されていたのを下山時に発見した。

事例④ 2020年8月、③と同じ折立キャンプ場でテーブルを囲み夕食をとっていたところ、小型のクマがテーブルに上がり焼肉等を食害した。この時、周辺には合わせて4頭(大型2頭、小型2頭)のクマがいた。

事例⑤ 2020年8月、折立キャンプ場に隣接する折

立登山口駐車場において、登山者が自家用車の横で腰を下ろし昼食を食べていた際、小型のクマが背後の笹ヤブから現れた。登山者が急いで車内に避難したところ、回収しそびれた弁当袋をクマが笹ヤブに持ち去った。



クマが弁当を持ち去った駐車区画。(折立登山口駐車場)
撮影:2020.8.18

事例⑥ 2020年8月、折立登山口の駐車場に駐車していた乗用車の窓ガラスが割られ、後部座席などが破壊されているのを登山者が朝に発見し通報した。同時期、乗用車のサイドミラーが破壊される事例、バイクのシートを引っかかれ傷つけられる事例があった。

事例⑦ 2020年8月、折立登山口の公衆トイレ横ベンチに登山者が座り靴を履き替えていた際、背後の笹ヤブから大型のクマが現れた。登山者が驚きベンチを離れると、地面に置いてあった食料と登山装備一式の入った大型バックを目の前でクマがヤブに持ち去った。

◆遭遇事例からみたクマの生態と対策

事例①のニアミスは、クマなどいないと思われがちな残雪期の亜高山帯においても登山者や観光客はクマへの注意警戒が必要であること、バスを待っている時でもクマに遭遇する可能性があることを示している。クマの生息地内で働く関係者らは、こまめ

4. その他

な戸締りや避難誘導訓練などのクマ対策をあたり前の事として地域に定着させる必要があるだろう。聞き取り情報から、弥陀ヶ原バス停よりも標高の高い場所で仔グマと大型バスが衝突していたこと、(負傷した仔グマが)足を気にしながら車道を走り下りる間、数台のバスとすれ違っていたことがわかった。当時一帯は数mの残雪があり、車道の両脇は雪が高い壁状になっていて、負傷したクマが車道から雪原へと脱出しづらい状況であった。交通事故に遭ったクマは慌てていたと思われるが、バス停の待合客や登山者グループと出会うと進路を変えて逃げ、人を襲うことはなかった。途中、建物に侵入を試みたようだがその要因としては、血痕の残っていた場所はガラス張りで建物背後の景色が見える状態であり通り抜けようとした可能性、あるいはクマ特有の行動で「身を隠してじっと潜むための物陰を探した」可能性が考えられる。本事例はクマが交通事故に遭いながらも(冷静に)人を避ける行動を選択したことにより人身被害を紙一重で回避できたと考えられる。あわせて、建物入口のガラス戸がきちんと閉まっていたことが建物侵入の防止に、バス停の職員がいち早く待合客を誘導したことが人身被害の防止に結びついた。なお、野生動物への配慮として、除雪の際には、残雪により谷状となった車道に迷い込んだクマやノウサギ等が容易に雪原へ脱出できるよう、車道脇の雪の垂直壁を所々くずして段差を解消する「エコロード化」も立山地域には相応しい対策と思われ、実行されることを望む。

事例②の美女平駅近隣での人身被害は、昔からクマの生息地だが少なくとも過去30年はクマ関連の事故が起きていない場所での出来事だった。過去に事故のない場所でも今日では安心できないことを示している。事故発生地は車道のすぐ近くで、バスの音や駅の放送が絶えず聞こえる環境だった。また、ク

マは夜行性と思われがちだが、人の影響が少ない山中においては日中も盛んに活動していて、この事故は13時頃に起きている。登山者や観光客は、人工的な音が絶えず聞こえるような場所でも、日中でも、クマに注意警戒をする必要がある。なお事故当時、周辺の森林内にはクマの採食物となるチシマザサの筍(ネマガリタケ)が多くあった。クマの採食物の中心は植物質で、「山菜類」の多くや、クリ・クルミはクマの好物だ。山菜の豊富な場所、豊富な時期は、丘陵・山地・森林限界を超える高山に至るまで、「笹ヤブやハイマツ、お花畑には採食中のクマが潜んでいる」と想定し行動することが賢明だ。美女平駅周辺では事故後、遊歩道脇のヤブを刈り払ってクマの潜み場を減らし、見通しを確保してクマを早期に発見できるよう対策を行った。また、その年はネマガリタケの発生時期が終わるまで、遊歩道を通行止めにした。

事例③④⑤⑥が生じた、折立キャンプ場は管理人の常駐しない無料施設である。登山者の中には、車内に臭いがこもることを避けるため食後のゴミを車両下に置き山行へ出かけることがあり、そのゴミをクマ等の野生動物が荒らす事例が起きていた。2019年頃からは、林道管理者がキャンプ場利用者に対し、クマ対策(誘因物管理と注意警戒)を徹底するよう熱心な声掛けとチラシ配りを一日に複数回行っていた。2020年にはクマの侵入を防ぐための電気柵をキャンプ場外周に設置した。しかし、クマを誘引する「夜間の調理や、食器や食べ残しを屋外に放置したまま睡眠する行為」がなくなり、クマの出没が絶えなかったことからキャンプ場の利用を2020年8月中旬に休止した。そうしたところ、登山口駐車場の車外で食事をしていた登山者に白昼堂々、小型のクマが近づき、弁当袋をヤブに持ち去った。その後、駐車場の外周にあったヤブを数m幅で刈り払い電気柵を設置し、クマの接近しづらい環境が整えられた。ヤ

ブの見通しが良くなった10月に現地調査を行ったところ、持ち去った場所から10mほど離れた所で、破れた弁当袋と無傷の弁当箱を発見し回収した。弁当箱にはクマの黒い毛が付いていた。クマは、がさつな生物と思われがちだが、採食行動はとても丁寧で、花や実を食べる時も前足で上手にたぐりよせて良質な部位だけ食む。今回の採食痕跡もそれを感じさせる状況だった。また、小型のクマは食料を持ち去った後に遠くへ移動せず駐車場付近で採食していたことが明らかとなった。採食中のクマに近づくことは危険だ。弁当が持ち去られた季節・時間帯には、周囲に多くの登山者がいて、事態を把握していない人が排泄等を目的にクマの潜むヤブへ近づいたならば、事故が起きていた可能性もある。これらの事例は人が大勢いるから・車の横だから・日中だから大丈夫という思い込みが今日では通用しないことを示している。また、張りっぱなしのテントをクマに破られた事例、車の窓ガラスをクマに割られ車内侵入された事例は、それ以前に人の食料やゴミを採食した経験のあるクマによるものと思われる。食料やゴミの管理不徹底は、管理を怠った本人ばかりでなく、その後同所を訪れる登山者も危険にさらす無責任な行為だ。また、このキャンプ場周辺では、遅くとも2012年頃から、林道沿いでアリ類を採食するクマ（構成は成獣のみ、親仔、仔グマのみなど様々）が頻繁に目撃されていて、観光客やカメラマンらがクマに数mまで接近し写真を撮影する行為が複数回確認されている。これらのクマは、出現初期から人に見られても動じなかったことから、そもそも人との距離感が近かったと考えられるが、「撮影者が極度な接近を繰り返した行為が人は無害な存在だとクマに学習をさせ人慣れを助長した。」と指摘する声もある。また、乗用車のボンネットに上る仔グマも出現し写真も多数撮られている。これら、一連の撮影行為は、

餌付けに類するクマの「人付け」として作用し、クマと人の間に必要な緊張感を消失させ、登山者との軋轢を深刻化させた可能性がある。



林道沿いで採食する親仔。（有峰）撮影：SK,2012.7.22

事例⑦の食料と登山装備一式が入った大型バックの持ち去り事例は、③④⑤⑥の生じた折立キャンプ場に隣接する登山口で午前中に発生した。ヤブの見通しがよくなった10月に現地を調査し、持ち去り地点から約20m離れた笹ヤブで食品包装等の採食痕跡（食べ散らかし）を発見した。食料品やポリカ製のボトル、医薬品（軟膏など）は全て歯形がついていたり、包装紙が破かれたりしていた。匂いが漏れることのなさそうな缶飲料もすべて齧られていた。一方、クマの食料にはならないシャツやズボン等の衣服、ポイズンリムーバー等は一切破損していなかった。食べられない物は無視しつつも、匂い漏れのない缶飲料にはきっちり手をつけていることから、このクマは缶の中身が食料であることを学習済だったと推測できる。この登山口では、数年前から空き缶回収容器をクマに持ち去られる事例があり、夜間は室内にしまっていた。しかし2020年の夏には、日中にも空き缶回収容器を荒らされるまでに悪化していた。人の食料やゴミに餌付いたクマ、食料や荷物の持ち去りに成功したクマは、外見（容器形状やバック形状）から食料の有無を判断できるほど学習して

4. その他

おり、食料の匂い漏れ対策を施しても効果が得られないことを示している。また、積極的に人へ接近を試みるクマに対しては、人の存在を伝える鈴やラジオは効果がない。この事例のクマは食料奪取だけが目的で、被害に遭われた方はクマに攻撃されることなく無傷ですみ、登山開始前に全装備を失ったことから登山を中止したそうである。クマの生息地の心構えとして、登山中のみならず、登山開始前や休憩時、周囲が明るい時間帯でも、クマが出現する可能性があり、特に出没が頻発な地域では、周囲のヤブにはクマが潜み人の食料や荷物を狙っている事まで想定し、「手荷物や装備はひと時も体から離さぬよう徹底して管理する覚悟」が必須な時代になったと言える。山行を計画する際には、都道府県がホームページ等で公表している「クマの出没情報」や個人のクマ遭遇報告（SNS等）を参考に、現地の最新クマ事情と、過去の軋轢有無を、前もって確認することを強く勧める。



回収した登山用品と齧られた食品包装。撮影:2020.10.27

3. 「with Bear」時代の装備・知識・訓練

クマの生息域が極端に縮小していた昭和時代、「登山中のクマ遭遇」は大変珍しい話題であったろう。その後、平成時代に（東北・中部地方を中心に）本州の大部分の山域でクマの生息状況は回復し、令和

となった今日では、クマと人の生活圏は隣り合い、時に重複し、「with Bear」の新しい生活様式が日常生活でも必要な時代に突入したと言える。かつてクマ空白域だった頃に登った山を再訪したところ、「熊出没注意」の看板を見かけ驚くこともあるだろう。立山山麓においてはクマとの遭遇は低山や丘陵でもごく普通の出来事で、立山駅前のロータリー内やスキー場周辺のみずバシヨウ観察地でクマの糞や採食痕跡が確認されていて、観光客や登山者による目撃も時折ある。目撃事例は、言い換えればその多くがニアミスであり、僅かでも位置関係やタイミングが違えば「バッタリ遭遇」にもなり得た看過できない事例である。「こんな所にクマは棲んでいない。こんな時間帯にクマは出てこない。」といった過去の常識には縛られず、現在のクマの生息状況と生態をつぶさに学び、急増しているクマ遭遇をひとりひとりが想定し行動しなければ、登山においてもクマとの軋轢は避けられない。私は経験を積んだ年数分だけ加齢による瞬発力や判断力の低下を実感しており、クマの不意打ちを受けた際に無傷でいられる自信はない。それを補うため、クマ遭遇時に役立つ情報の収集と、装備の見直しを常に心掛けている。そのいくつかを紹介するので、皆様にも積極的に取り入れていただき、安全で楽しい山行や自然とのふれあいを今後も継続していただければ幸いです。



立山駅前に残るクマの糞。
撮影：2018.10.18

◆「首ガード・うつ伏せ法」で顔を守る

北陸電力(株)が山中で行動する職員等のクマによる被害防止を目的に作成した印刷物(抜粋)を紹介する。これには、襲われてしまった際の防御姿勢や出会った時の対応法がまとめられている。

クマの攻撃は、最初の一撃が最も被害が大きいとされる。攻撃されやすい部位は顔や頭、胸などの上半身前面で、引っかけられたり噛まれたりした事例が多い。顔を攻撃され失明や歯を欠損すると社会復帰がより困難になる。何としてもそれを防ぐため、クマの攻撃を避けられない状況に陥った時には、『素早く地面にうつ伏せになり、顔と体前面を隠し、急所となる頸部を手で覆って守る「首ガード・うつ伏せ法」を必ず実践』してもらいたい。この時、ヘルメットをかぶり、バックを背負っていれば、体の露出が大幅に減る。植物が主食であるクマには積極的に人を襲う習性はなく、クマは人と遭遇して緊張し、逃げられないと判断した際に威嚇突進をしたり、ごく短い時間だけ攻撃を行い即逃走したりする事例がほとんどで、長時間にわたり攻撃をされ続けることは稀である。私は、富山県内の里山がどこもクマの生息地になり、冬も目撃情報が散見される状況を鑑みて、スノーシューハイキングや丘陵地での生物調査も、常にクマ遭遇を想定し「ヘルメット・バック・クマ撃退スプレー」の3点を装着している。また、行事参加者を森へ案内する際には、準備体操の後に「クマ体操」と名付けた防御姿勢の練習を全

北陸電力株式会社 技術開発研究所

クマによる人身被害を防ぐために クマにご注意!

初版

ツキノワグマの特徴

クマは1年中、山で暮らしています
採食については以下の通りです

耳 人間よりは良い。

鼻 犬の4倍程度良いと言われている。

口 鋭い犬歯や木の実をかみつぶす臼歯がある。

足 走る速度は時速40kmと言われる。速いから、普通の人間は逃げられない。バランス感覚が良く木登りが得意。

手 最大の武器「爪」は常に生えている。かぎ爪で、爪に全体重をかけてフェンスなどを登ることができる。引っかけると失血死する恐れもある。

頭 かしこく、えさ場は覚える。臆病。

冬眠 冬眠中は何も食べません ※冬眠しない個体もいます

冬眠明け プナ、コナラ、クリ、クルミなどの木の実に注目が集まる。ハチ、アリのなどの昆虫類、植物類

冬眠明け 冬眠明けは、冬眠明けの活動範囲が広がる。冬眠明けの活動時間は、冬眠明けの活動時間が増える。

冬眠明け 冬眠明けは、冬眠明けの活動範囲が広がる。冬眠明けの活動時間は、冬眠明けの活動時間が増える。

成獣 体長 120-145cm 体重 40-130kg

クマから身を守るための装備チェック

ヘルメット リュックサック ストックや傘
音のするもの(クマ鈴・ラジオ・笛など) クマ撃退スプレー など
※使用期限を確認すること

クマ撃退スプレー ラジオ クマ鈴 ストック

クマに遭遇しないために

POINT 1 クマに自分の存在を知らせる

クマ鈴やラジオ、話し声で常にクマに人の存在を知らせましょう。特に、藪や曲がり角・起伏のある場所などの見通しの悪い所や、風や川の音が大きい所では手を叩いたり大声を出すなどクマに存在を知らせ、不意の出会いを避けることが大切です。◀ 車から降りる前にクラクションを鳴らし、周囲を警戒しましょう。

POINT 2 クマの痕跡に気を付ける

クマの好物であるドンギリ類(コナラ・ミズナラ)やクルミ、ミズキ、カキやその周辺には、爪痕や糞、採食の痕跡が残っています。また、木の上で枝を手繰り寄せて木の実を食べた跡の「クマ棚」などクマの活動のサインを見逃さないことが重要です。

もし、クマに遭遇してしまったら

クマは、顔を齧ったり、強力な爪で頭部や顔面を叩くなど上半身を攻撃してくるケースが多いです。まずは、落ち着いてクマと視線をそらさず、ゆっくり後退することが肝心です。絶対にクマに背を向けて走って逃げてはいけません。

被害を最小限にする行動を

襲われそうになったら すばやくしゃがんで、大げなをしなため防御姿勢を!!

後ろで手を組んで首を守ります。リュックサックが背中を守ってくれます。足を広げて、クマにひっくり返されるのを防ぎます。足は踏まれるかも…ガマン。

致命傷を免れるため、頭動脈や顔を守る姿勢をとり、クマが立ち去るまで耐えしごます。ヘルメットやリュックサックを身につけることで負傷を軽減することができます。

●首ガード・うつ伏せ法
うつ伏せで両手を首の後ろで組み、頭動脈と顔を守る。

●クマ撃退スプレー
※高圧噴射タイプは有効です。

近くで目撃したら

木などの障害物にすばやく隠れましょう。攻撃をかわすこともできます。この時「クマ撃退スプレー」を使うことで逃げるための時間稼ぎにもなります。

傘を持っていたら、すばやく広げて、存在を大きく見せることも有効です。

北陸電力(株)技術開発研究所発行のクマ被害防止パンフレット

4. その他

員で実施している。二人一組でクマ役と登山者役を交互に行い、実際に起こりえそうな「キジ撃ち・お花摘みでのバッテリー、早朝犬散歩でのバッテリー」などのお題を寸劇風に提示して、それぞれが役を演じながら素早く伏せる術を体得してもらおう。クマ体操によるゲーム感覚のシミュレーションは、過度な恐怖心を煽ることもなく、クマの生息地への立ち入りを前向きに捉え野生動物への関心を醸成できる訓練として、大変好評である。「地震がきたら机下に隠れる行動」を誰もが実践できる様に、この「首ガード・うつ伏せ法」を全国民および外国人旅行者へも普及したい。

◆物陰に隠れる「木化け法」

クマと遭遇した際、距離があればクマの行動を注視しつつ後ずさりをし、物陰にさっと隠れ静止する行動が推奨される。この際、背を向けて走ったり、大声で叫んだり、クマを刺激する行動をとってはいけない。人が物陰に隠れ静止することで、クマは人を認識できなくなったり、クマが落ち着きを取り戻し、クマ自身からの逃避を促す効果が期待できる。万が一、クマが突進してきた場合でも、立ち木や看板、電柱などの裏側に避難していれば、直線的な突進をかわせたり、打撃のダメージを軽減できたりする。周囲に細い木しかない場合でも、鳥カゴ状の囲いに入るような位置へ逃げ込めば木立が防護柵になる。この様な防御法を「木化け法」と称す。普段から、木に化ける（隠れて静止する）場面を想定しながら歩くと良いだろう。

◆「クマ撃退スプレー」は安価なお守り

クマに襲われたり突進された際に、市販の道具で最も有効な装備だとされる。唐辛子から抽出した濃縮成分を高圧で数メートル先まで霧状に噴出するこ

とで、クマの攻撃を抑制できたり、突進を回避できる効果が高い。登山用品店で8千～1万円程度で入手できるものの高価すぎると敬遠されがちだが、決してそうとは思わない。使用可能な期間は4年程度と長く、それを5人組で購入したならば「1万円÷4年÷5人=500円」となる。年間500円の負担で何回の山行を安全安心なものにできるのか、その費用対効果を是非考えていただきたい。使用期限が切れたスプレーは、山仲間との訓練で使用し、使い方に慣れておくのが良いだろう。スプレーは数回に分けて使用できるが、残量が不足していたり、スプレーの内圧が低下して次に使用した際に霧が遠くまで到達しない場合もあるので、使いかけスプレーの携行には注意を要す。私は、1グループで2本以上のスプレーを別々の者が携行し、かつ直ぐに取り出せる腰などへ必ず装着することとしている。

◆「ストック・傘」の活用

クマに出会った際、長い道具を振り回すと、人の存在をクマに早く知らせたり、体を大きく見せることができ、クマの方から逃げ出す効果が期待できる。傘は開いて前に突き出せば、更に体を大きく見せられるし、万が一クマに突進されても、最初の一撃を突き出した傘で受けられれば身体へのダメージを軽減できる。「登山にストックは不要」と考える方にも、クマの生息地へ出かける際にはこれらの携行を勧めたい（散歩や児童の登下校には傘がお勧め）。

◆「タオル」は常に取り出しやすく

好奇心の強い若グマや、極度に人慣れし食料を狙うクマが、人を追跡する事例が稀にある。そのような時、所持品をクマの前に投げて気を引いた体験談が多々あるが、決して食物を利用してはいけない。食物をクマに与えた場合「人に近づくと食物が手に

入る」という学習をクマにさせてしまうからだ。その場はしのいけても、登山道や登山口の様に多くの人を訪れる場所では、餌付いたストーカーグマをいずれ生み出す。クマに対して投げるものは、首に巻いたタオル・帽子・ハンカチ・ティッシュなど、食べることのできない物から試して欲しい。緊急時には心細い思いをするだろうから、それに備えてクマ撃退スプレーを装備に追加してもらいたい。

◆「犬連れ」は危険な場合あり

クマは、外敵に出会った際、ヤブにじっと潜みやり過ごす行動を頻繁に行う。人がクマに気付くことなくそこを通過すれば人身被害にはならないが、犬がクマを発見し吠え立てることで、クマを興奮させ襲われたと考えられる事例が複数ある。北陸地域では、クマの秋の重要な食料となるドングリやブナの実が不作になると、人の生活圏にクマが現れる大量出没が数年毎に発生している。その様な年には、犬の散歩中に襲われて死傷する人身事故や、庭先の飼い犬がクマに襲われる事例もある。狩猟者が訓練を受けた猟犬を連れて野山を歩き、野犬まがいの犬たちが集落を徘徊していた時代を知らぬ新世代クマにとって、犬はさほど怖くないのだろう。今日、クマ生息地で登山に犬を連れ歩く護身術は、かえって危険かもしれない。

◆出発前には現地クマ情報の収集と予習

リスク軽減のため、出発前には天気予報の確認にあわせて、現地のクマ情報や、最新の装備や対策をチェックする習慣を身につけていただきたい。ホームページ等で情報発信を行っている団体の一例を記す。

- ・日本クマネットワーク (JBN)
- ・日本ツキノワグマ研究所

- ・信州ツキノワグマ研究会
- ・ピッキオ「ヒトとクマの共存をめざして」
- ・あきた森づくり活動サポートセンター「クマの生態と対策」
- ・富山県生活環境文化部自然保護課「出没情報地図【クマつぶ】」
- ・アウトバック (クマ撃退スプレー等の取扱い)

謝辞

貴重な写真や目撃情報等の提供、および調査にご協力いただいた以下の方々に厚くお礼申し上げます。

(敬称略 五十音順)

泉山茂之 岩田和也 上島憲治 大塚伸 奥田實
河野さおり 小杉真也 後藤優介 佐伯栄祥 佐々木賢二 澤田研太 杉田知佳 高橋敬市 堀井琢道
水野洋子 有峰森林文化村 岳人編集部 信州ツキノワグマ研究会 日本クマネットワーク 北陸電力(株)技術開発研究所



亜高山帯の草原で採食する親仔。(美松, バス車内より)
撮影:OM, 2016.7.13